

「周縁」から御手洗靖大

今月から時評を担当する。和歌と短歌の間で、今を考えたい。本稿執筆中の五月現在、東京は非常事態宣言下、歌会やイベントの中止が相次いでいる。博士後期課程に進学したものの、式典は無く早稲田大学は閉鎖、春学期の講義はオンラインによるものとなった。非常勤先の高校もオンラインによる授業を行う。リモートワークである。

冷泉家の月次歌会も休会となり、歌題の口伝が文書で送られてきた。これで歌を作り、詠草が添削される。リモート歌道である。和歌史上、通信添削はさほど変わつたことでもない。近世には美濃の豪商が京都の複数の宗匠に同じ詠草を送り、添削を見比べていた事例もある（神作研一『近世和歌史の研究』角川学芸出版2013）。封建体制の中で、都の宗匠を相対的に見た地方歌人と思う。中止の相次ぐ歌壇だが、「短歌研究」五月号が二八〇人による作品を集め、圧巻であったことは特筆に値するだろう。編集後記には、恒例として刊行してきた男性歌人特集号と女性歌人特集号を、現在の編集方針にそぐわない企画として取りやめた結果だといふ。歌壇で批判されてきたジェンダーの問題に関して画期となる出来事の一つといえよう。

「短歌」五月号のリレー連載「青年の主張」で山階基が同リレー連載「親父の小言」（見開きで隣り合っている）を痛烈に批判して

いた。これも、「短歌研究」と通じる問題意識である。「親父」という表題どおり、書き手として女性歌人へバトンが回っていないことへの批判がある。

「親父」とは、これまでとは異なつた方向へ傾いていく若い世代に対して、その方向性に疑義を呈する父性を帯びた存在として使われているのだろう。若い世代から見ると、たちはだかる壁と言えようか。そのような存在が、「親父の小言」という旧態依然のフリーズをもつて現れ、若い世代にその存在自体を批判されるとは、よくできた話ではないか。山階の痛烈な批判こそ、期待されてきた反応だつたのではないかとさえ思えてくる。

「青年」にツッコまれる壁であり続けるのか、それとも「青年」へ歩み寄るのか、はたまた「青年」へ反撃に回るのか、今後の「親父」に注視したい。

「かりん」が刊行五〇〇号を越え、五月号では「次代の駆動力」と銘打つて若手特集を組んでいた。企画者の大井学は、何かを取り上げる時に生じる、周縁的な、その他の存在の中に、「若手」という語があると指摘する。「若手」は誰もが通過する周縁の状態だが、これを「内在化することによって、集団・組織の代謝が可能となる」という（総論・ことばの背景）。ネット空間の共同体化によつて、結社の存在意義が問い直されている中、この視点は重要である。また、このような企画が立ち上がり、実行される組織力も、「かりん」の強さだと思ふ。

「心の花」の「若手」はそれぞれの地で頭角を現している。私も、この変容の時代に組織の中心へ揺さぶりをかける「周縁^{若手}」でありたいと思う。ライブは少なくともない。